

GR
白雲郷

とり
お



19

昭和46年7月1日

吉祥天の御利益について

表紙の吉祥天は救世大観音を御乗せしている。堂宇内の左側ホール中央に安置されております。

材は檜で、総高三・二米あり、彩色は磯貝先生です。

吉祥天はインド古代の神話の中にあるラクシミーの事で、インドでは最も重要視されております。

是が、仏教にとり入れられてからは、**福德の功徳を司る女神**、として大衆に親しまれ、深く信仰されています。吉祥天は毘沙門天の妻とも云われ又弁財天はその分身とも云われております。

目 次

- 表 紙……………吉祥天 桐江作
- 印度附近の旅路（その九）……………桐 江 1頁
- 道光禪師（故隴仙峴下）御法話（その二）……………7頁
- 苦悩の解説（光山老師の講話より）……………10頁
- 観音妙智力……………新妻治郎…12頁
- 西 遊 記（その十四）……………岡部千三…13頁
- 吉祥寺観音春の大祭名店会館……………金澤富夫…19頁
- 春季例祭並に救世大観音世話人会……………20頁
- 壺万体観音奉安者及特別寄進者芳名……………21頁
- 壺万体観音奉安申込用紙……………23頁
- 救世大観音工事経過……………24頁



印度附近の旅路

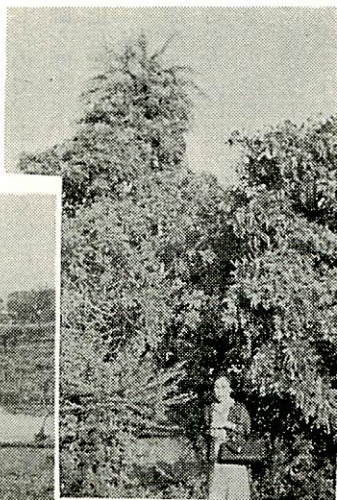
(其の九) 桐江

ポパール

十一月十五日、今日はニューデリーをあとに、憧れのサンチーの大ストウーパの見学です。朝四時起床、昨日冬着や不用の品々を内地に送ったので、トランクも軽くなり、着ぶくれの重装備とは打って違って半袖の飛び上りそうな軽装で飛行機に乗り込み、南方に二時間飛んで、印度の中央に近い、ポパール市の飛行場に到着、直ちに今夜宿泊するホテルに行きました。

ランセルヒラー湖 (ポパール)

ホテルはバンガローのような粗末なものですが、十米もある様な森林の中に、熱帯的な明るい赤、黄、とりどりの花が、美しく咲き乱れて居り、其の間から、十六平方キロもある、印度では一番大きいと言われるランセルヒラー湖が見えます。其の湖畔を、頭に壺をのせて水運んでいる少女と子供等や、何十頭も群をなした水牛が、悠々と遊んでいる様は絵のように美し

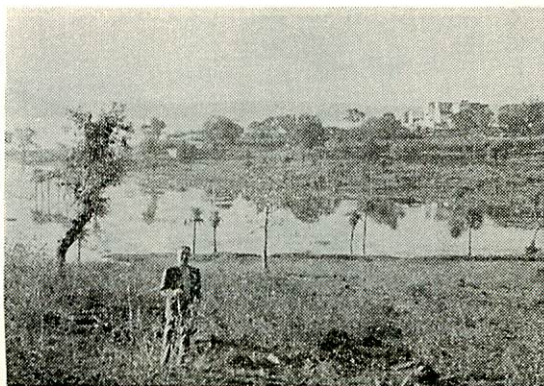


↑
←ホテル附近の花のジャングルと画の様な雄大な湖水

く若し、四十度近い暑さでなかつたら、定めし極楽か、天国もかくやと思われ
ます。

道すがら

直ちに五台の自動車を連ねて四時間の道をサンチーにと向いました。

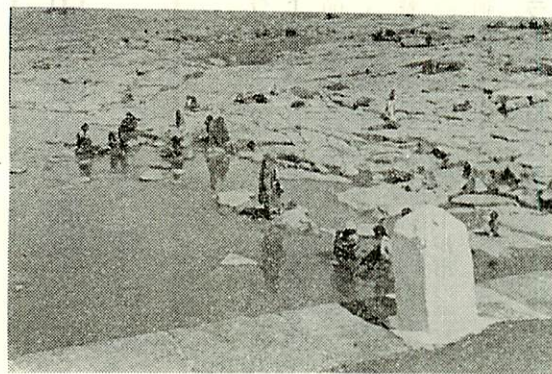


見渡す限り草原の間をはしる道の両側は、野生の芙蓉が延々と何十キロも咲き続いて居て、結構目を楽しませました。実にみじめな賤民の小屋が、点在して居るのを見て、何とも云えぬ哀れさを感じました。併し家を持たぬ人民が、総人口の二〇%も居るのにくらべれば、まだ金持の部類でしょう。

追突難

自動車の追突した川の洗濯場

サンチーに行く途中に川があり、印度人独特の洗濯をして居ったり、河原に之を干している、のんびりした状況を、前の車の人が写真を撮るうと、橋の中央で急停車したので、私の自動車が急停車したところ、後の車がカーブの下り坂のため、私共



の車に激突して、車は故障してしまいました。私夫妻は川原を見ていたところ、突然ガクンとなり、首筋を痛めた様でしたが、前の席にいた若い友人はいねむりして居たので非常なショックを受けましたので、幸い近くにあったホテルにたどりつき、医師を呼んで、応急手当を受け安静を命ぜられたので、止むなく友人を残して一同サンチーに向いました。私は痛む首をがまんして、サンチーの大塔を見学し帰途友人も同道して、今夜宿泊の予定地、ボンベイ送り友人は直ちに入院されましたが、私は塗布薬と吞薬で入院せずすみしました。友人は、入院規則の非常にやかましい、殊に言葉も通じない異郷の病院に、一人残されるのが非常にさびしそうで気の毒でした。



追突により前も後も破損した自動車（後方が橋）

サンチー大ストウーパ

サンチーの大ストウーパは西紀前三世紀頃、アシヨカ王が建てたものです。

このストウーパは高さ十七米、直経三十七米もある半円形の土饅頭で、其の周囲に高さ三・三米の石の欄楯をめぐらし、東、西、南、北の四方に十米以上もある雄大な、トラナ（塔門）が四門そびえております。

そして其の門一面に仏伝をテーマとした、豪華な細かい彫刻で飾られている有様は実にすばらしく、さすがに印度随一と言われるだけあって、啞然とするばかりです。所々に当時の王族の寄進者の名が彫られているのも、一層、往時を忍ばしめます。

東門の伝説

東門の右側中央に若い婦人がマンゴーの木に腕を懸けている彫刻が名高いもので、次のような物語があります。昔印度では女は外出しても外泊は許されませんでした。ところが或る婦人が結婚式前日に外出した処大雨となり、川が氾濫して帰ることが出来なかつたが男は誤解して、嫉妬のあまり結婚を破談すると言うので、女は非常に悲しみ、お釈迦様に「どうしたら身の

潔白をあかす事が出来ましようか」と、教えを乞うたところ、お釈迦様は「マンゴーの木に右手を懸けて、ひたすらに祈れ。そして若し潔白ならば、木の実が沢山なる」と教えられたので、女は其通りにしてお祈りをしたところ、立派に木の実がなったので男は驚き、且つ疑いが晴れて、目出度く結婚したと云う伝説を表したものです。

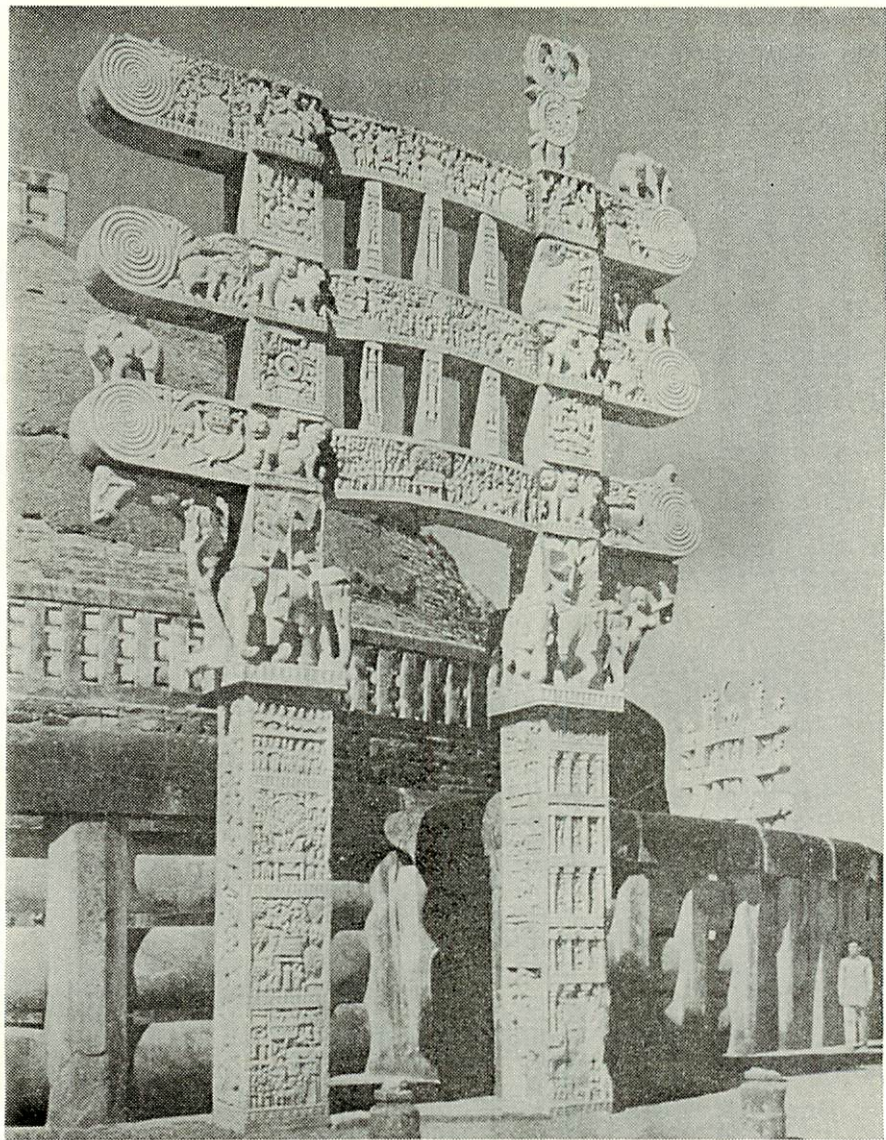
私は十年前、柿と葡萄に手をかけ、右手に極楽鳥を乗せて可愛がっている豊稷と慈愛を表現した婦人の、レリーフ（二・五米）を製作して、観世音センターの女湯の壁面に飾りました。どうぞ一度御笑覧下さい。

附近の遺跡

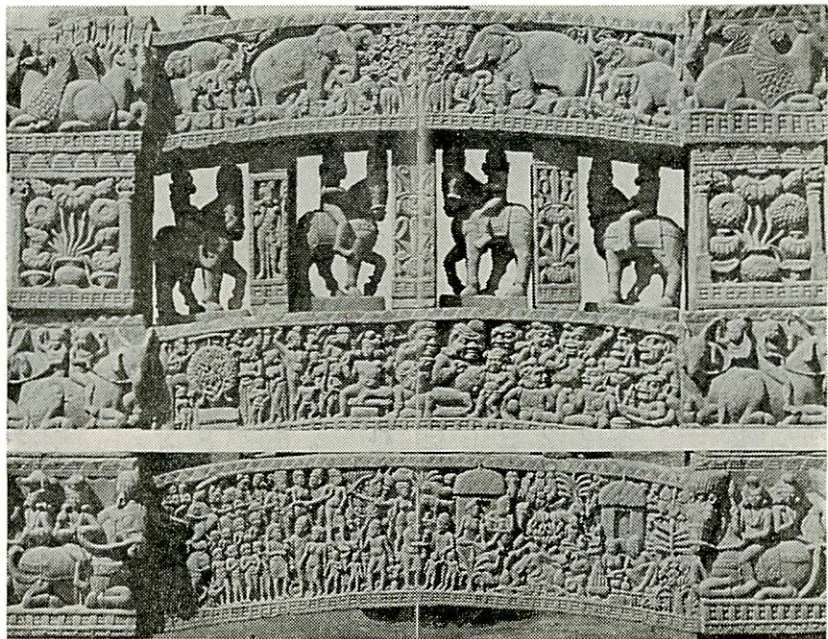
大ストウーパの周囲には比丘^{ビク}と比丘尼^{ビクニ}の大きな僧房其他沢山の建物の基礎や、完全に近い礼拝堂及び、祭壇があり立派な如来の、石彫が祭られてあります。

この建築様式は、ギリシャ古典建築の影響を受けているとのことで、なかなか見事なものであります。

鳥居観音境内山頂に建立されつつある、救世大観音を乗せて居る堂宇内の通路の天井図案は、これからヒントを得たものです。



トラナ（東方ノ塔門） 後方には半円形の土饅頭が見え、又此の門の右側中央には女像の彫刻があり、北ノ塔門も見える



こまかい彫刻でうづまる門の棟の一部



観世音センター女湯の豊穡の女神
(桐江作)

又大きな僧房の近くにエロ的彫刻が沢山あって、修行僧が之を見て、里心を起し逃げ出す者もあるが、思想堅固な者は、之に迷うことなく修行を積むと、此所の礼拝堂で卒業式が挙行され、一人前の比丘として全国に伝導の旅に出る事が出来ます。

又アショカ王が、全国に建てたと云う四頭の獅子の彫刻を柱頭にのせた、七十フィートもある石柱がいくつにか折れて倒れてありました。アショカ王の、二人の妃が嫉妬のあまり、王の座禅している処の菩提樹を毒薬で枯してしまいました。王は泰然として座禅をしつづけて

居られるのに感激して、前非を悔い、男の首を捧げて陳謝した処、枯死した菩提樹が生き返ったと云う不思議な伝説があります。

男の首とは甚だ残酷に思われますが、このような、生贄の話は、回教を始め、各宗派によく聞く話です。

この丘の北方には、釈尊の二大弟子である、舍利弗と、目犍蓮の遺骨を祀った小形の、ストゥーパがありまして、大ストゥーパによく似て建造されており、完全な形で、保存されているとのことです。

サンチーのストゥーパが保存されているわけ

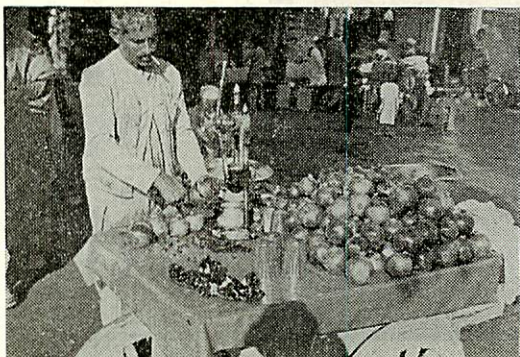
サンチーのストゥーパは今や国際的に有名な仏教聖地として、外人の参詣者が、年々増加しているとのことですが、このような、二千数百年前の美しい彫刻で万艦飾してある仏教の大建造物が、どうして、回教の進入の時、破壊されなかったか、と云うと、当時は、此所はジャングルに覆われており、又大道路が此地より遠く離れていたため、発見されなかった、と云われております。

何はともあれ、このような貴重な仏教史跡が現在、完全に近いままに、保存されておいて、私共衆生を、喜ばせて頂きますことは、まことに有難い事とつくづ

く感激いたしました。

前号で鬼子母神の伝説を記しましたが、如來が鬼子母神に、「人の子供が食いたくなったら、人の肉に似て居るザクロの実を食べよ」とさとされまして。

此のザクロはガンダラ地区の特産で、どこにでも売っているのを見受けました。此の写真はカブルで写した露店で、一個買って食べて見ましたが、実に美味で、果肉も多く一個で満腹する程でした。



店露の賣る実の柘ざくろ

道光禪師(故瓊仙猊下)御法話

(瓊仙いかだ集より)

(其二)

(五) 心と身体との着物について

衣食足りて礼節を知ると申す通り、衣食住のうち、住居は(たとえばのことですが)橋の下でもどうにかすこせますが、衣と食とは、簡単ではありません。

ここで衣について禪師のお話をお伝えします。鳥獸類は氣候の変化に順応できますが、人の生活上の衣服の目的は、寒暑を調節することであり、そのことだけでよいのですが、さて、趣好となれば種々雑多で、その中にたのしみもあり、或は不必要に飾らねば気のすまぬ向もあります。とは申せ、服装が、人の品位を、高下することは、日常経験することですし、職業によつては服装を整えねばなりません。従つてぜいたくにならぬ限り、服装を整えることは大切です。

処で、心につける着物は一層大切でありまして、仏は懇切丁寧ていねいに教えを示されています。精神の修養と心の浄化を行うため数々の教えがあります。その中で、精神の美服の代表は「慚愧ざんきを知る」ことで、お釈迦さまの遺教経によりますと、「慚恥ざんちの服は凡ての莊嚴中

第一である。慚は鉄鉤の如くよく人の非法を制す。是故に當に慚恥すべし。云々」とありまして、人を価値づける重大な要件です。孟子も「恥を知ることは大切で、これを得れば聖賢、失へば禽獸」と訓え、人が恥を忘れると人道の破壊者ともなります。昔の武士道が恥辱を命より大切に重んじた真意は永遠に変わりません。

此の慚愧を知るといふ心の美服を一層美しくするのが、心を堅固にする「忍耐」といふ着物です。この忍耐は、並々ならぬもので、鎧よろいにたとえています。このようにして身体からだの衣と共に、心の着物を備えることが、仏の教えにあるように、品位を高め、威嚴を生じることになります。

(六) 修養示訓

禪師の許へ、自己の性癖を自覚し、修養の行い方の教えをもとめられた人に、禪師は、其心掛の立派な態度を感心せられて次の訓えを示されました。

一、孤独感、厭世的感傷を克服するには、常時神や仏が身近そば即ち心に在ると信ぜよ、光明は信仰によつてのみもたらされるものなり。

二、不撓不屈の精神に乏しいとのことですが、雨だれが石を穿うがつたとえで、惰氣だいきを吹きとばされよ。

三、猜疑心は、あなたの人格を傷つけ、大事を失却する故、公平無私の雅量を養って下さい。

四、己れが偏屈なのは、親が無い者の特異性だのとこのですが、とんでもないことです。きゆう屈な考えをせず、水が器に従う純な心になって下さい。

五、自信過剰から自尊心が強いと思ひ込んでいるようです故、まづ正しく自己を信ずる力を養ひ、自信を捨てて、人生立脚の根石たる自信力をもつこと

六、経済観念は生活の基です。勤儉に徹して下さい。

要するに、修養はむづかしいことではなく、終生の実科です。退屈せずに、守り、勤め、信仰しましょう。

(七) 禪定をもって住居とすること

人は住んでいる所で気がかわります。孟子が子供時代に、孟子の母が、良いしつけをさせるため、居所をうつしたいわゆる「孟母三遷の教」は有名です。

人の住居は、聖人や君子のように、居所は膝をいれるだけあればよい、とばかりはいきません。併し乍ら昔から「富は屋を潤す」といって、経済的に成功すると、上等な家を造りたがります。決して非難すべきことではありませんが、二宮尊徳翁が説かれた報徳の根本である「分度」を守りたいものであります。

さて、心の住居はいかがでしょうか。梵網経の中に

持戒を平地（敷地）とし、禪定を住居として、遠観解脱の智慧を得るとあります。いわゆる「八方風吹けども動かぬ」ように心の住宅を建てよとおさとしてです。

仏教では戒定慧の三学ということから仏法の悟りに入り、戒を守り、遂には心の奥から仏智を開発せよと教えています。易しく申しますと、身持ちを正しくして、誘惑にまげず、心を坐禅に落ちつけて安定させる事です。唯禪定と坐禅とは説き方に相違がありますが、禪といふことは精神を安住させることです。精神を安定させる心の住居こそ釈尊によって、三千年来ひらかれてきた信仰の一元元であります。

(八) 彼岸の悟り

年二回春秋分に寒暑を越えて彼岸を迎え仏や祖先を祭る行事はわが国における宗派を超越した民衆的の行事です。処で「彼岸」とは（理屈ぼくなくて恐縮ですが）正しくは、「到彼岸」と申し、煩惱、迷忘、凡夫の「此岸」から、菩提、悟道、覚者などの「彼岸」へ到達する意であることは、すでに皆様御存知です。

唯彼岸と申しますと、彼方に仏語で涅槃常楽、即ち美しい理想境があつて、六波羅密、即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の修行したのち、到達出来る

と、考えられています。が、実は仏の世界であります。禪師の寓話に、大きな河に架けられた橋があり、この河をこの世に、橋を人生にたとえています。

併し橋の向うは雲の中に消えてゆく、という不思議なたとへですが、いわゆる阿弥陀如来の極楽浄土は、十萬億土の遠方にあるということ、教えています。

そして彼岸は仏の世界、真理の世界で無限であります。それなればこそ仏教の尊さ、修行の力強さがあり、日常行いを正し、真面目に信仰の生活を志ざすことが大切で、前記の寓話にある人生という橋を一步一步油断なく、足許に気をつけて渡る道理を悟るべきです。

仏の教えを信ぜず油断すれば、踏み外して、河へ転落し、人と生れ乍ら、仏の教えの有難さを覚えることなくあの世へゆきます。

禪師は、此項目を「当処を離れず彼岸に到れ」と記されていますのは、何物にも惑わされず、足を大地（橋）にしっかりと踏まえて人生をおくれとの有難いお訓えです。卍山禪師が物外居士に示された句の一節、

只管の一念回向の力。寸歩移さず十方に通ず。
彼岸の彼方即ち雲の彼方ばかり見ないで、足許をよく見とどければ、これこそ彼岸の浄土、涅槃常楽の地であるとの教えで、「一日の行持、これ諸仏の種子なり

諸仏の行持なり」と仏恩を感謝し、毎日己れの行いは仏の行持なりと信じるならば、如来（仏）地の彼岸です。現実を無視して未来はありません。

今日の行持は明日、明後日、やがて一生を無限の彼岸へと導かれて行きます。より遠い、高い、尊い境地を見出して、暑さ寒さも彼岸まで、と言われる穏かな陽光で身心を浄め、彼岸についての仏の真理を悟りましょう。

（九）生きることと、食ること（前半）

少しでも永く生きたい、という生への執着は本能であり、生を資けるものは、食物でして、衣食住の中の第一の要素です。「餓じさと寒さと恋をくらべれば、恥かし乍らひもじさが先」の歌の通り当り前のこと乍ら、この大切な食物について、仏教では、四通りの食即ち四食に分けて訓えています。

段食、触養、思食、識食、です。順々にわかり易く説明されています、むづかしくありません。

段食とは分段の意味で、日本食、西洋料理から始まって、人の食物は種類も多く、更に様ざまに分れ、味覚を喜ばせるようになっていきます。

これを段食と言います。（美食が過ぎれば、身体をこわす戒めの教への基ともなります。以下次号

苦悩の解脱

現代に生きる

観音経より (二)

光山善雄先生

大阪や東京の駅の混雑する状態を見て、人間の多いのに驚きます。よくもこの様に沢山の人が動いているかと。それが夜になると寝る宿に帰ります。地球上には三十数億の人間が生活しています。ここに云う無量百千万億の衆生とは、観音経中のことですが、十方衆生のことで、みな苦悩の持主です。人生に苦悩がなかったら仏法は必要がないでしょう。財があればあつて、なければないで苦しんでいます。牛や豚には苦悩はなさそうです。

「善男子」とは善男善女のこと、この生、老、病、死の苦を四苦と申しております。生れる時は笑つて出るのはなく、母の胎内より出生する時は痛い思いをして、「オギャア」と叫んで出て来ます。病氣をする、怪我でもすれば母の心配は大きいのです。一人前に育てるにはお金ばかりでなく大変な心身の苦勞が必要です。

人間は老人となります。これは止むを得ません。最後は死に直面いたします。老少不定でいつ死が訪れる

かわかりません。最近の交通地獄は大きな問題だと思
います。

その他愛別離苦、求不得苦、怨憎会苦、五陰盛苦を
合せますと八苦になります。

人は苦悩の入れ物

人間は苦悩の動物です。老人の年金制度が完成して
も、死はやって来ます。可愛い子や孫、夫や妻に別れ
るつらさ、お金が欲しい、美人が欲しいと思つても、
そうやすやすと吾が物にはなりません。これが愛別離
苦、求不得苦です。いやな奴と時々遇わねばならない
のが、怨憎会苦であります。五陰盛苦とは、われわれ
の身体が青年の時は色欲盛んで、その精力を調整する
ことが容易ではありません。人間は性のためにも苦悩す
る動物です。そこで上の四苦と後の四苦を合せて八苦
となります。

苦悩を除く方法

観音さまは、苦悩を除く方法を教えてくださいまし
た。その方法は南無観世音菩薩の名号を称えること、
あり、これが苦悩を除く解脱の道であります。一心に
観音さまの尊号を称えれば必ず苦悩が除かれ解脱す

ることが出来るとあります。

観音さまの威神力を感じるには一心称名よりほかに方法はあります。聞くとは信ずることであり、まです。即ち聞即信で、観音さまを心で信じ口で称え身で礼拝することです。口と心が違ふニセ信心では解脱することは出来ません。聞いて信じ一心に称えるものを救うと仰せになっています。ですから南無観世音菩薩と一心に称名せば、すべての苦悩は解消して解脱することが出来ましょう。

彫刻の猫

ある旅人が宿を借りました。この旅人は、夜の夜中でも、コソコソと猫を刻きんでおりました。旅人は翌日宿銭の代りに彫刻した猫をおいて行き、『この猫は店の番頭をつとめることが出来ましようから、可愛がって下さい』と書いた紙が置いてありました。宿では本物そっくりの猫を店におきますと、番人の代理をします。この品は十文ですと申しますと十文を猫が受けとり、これは八文ですと云えば、客が十文出しますと二文のおつりをよこします。あの店には猫の番頭がいてお金の出し入れをやっていると評判になり、お客さんは押すな押すなの大繁昌で、見る見るうちに金持にな

りました。

これを聞いた隣りの欲ばり婆さん「オレも一つあの隣りの猫を一日なりと借りて一儲しよう」と考え、婆さんは隣りへ行き上手にウソを云って猫を借りました。「私の家にも猫の番頭が来ております。何でも買ってください。代金は猫が受けとります」と云うものですから、それまた評判となりお客さんが集ってききました。しかし、猫にお金を渡しても受とりません。おつりもくれません。婆さんは腹を立てて「こんな云うことを聞かない猫は風呂の下に入れて焼いてしまえと云うなり焼いてしまいました。

お隣りの爺さんが来て、早く猫を返してください。と云うと、「云うことを聞かない猫だから風呂のかまに投げこんで焼いてしまった」と答えました。爺さんは泣き出し「可愛想なことになった。それなら灰なりとください」と云って、灰をもらい、これに、戒名をつけて、ねんごろに祀りました。この猫の作者は、有名な左甚五郎でした。彼が一心こめて刻んだ猫なればこそ、番頭の代りになったのでしょう。また無欲のお爺さんだったから、その福德が恵まれたのでしょう。一心の力ほどおそろしいものはありません。

「一心名を称せば」とあります。

合掌

観音妙智力

新妻治郎

春は緑と花に囲まれ、秋は全山紅葉に映える。鳥居観音は池袋其他から、飯能まで、名栗川添いに町並を通り岩影を縫って車で三十分、左手に高くそびえる真白な大観音像が、続いて白亜の三蔵塔が緑の中からそして紅葉の間から眼に飛び込んで来る。

左手の橋を渡ると鳥居観音の本堂に着く……。

静寂な境内には大藤棚、金木犀や紅しだれなど見事な枝ぶりで迎えてくれる。

私はここにお詣りを三十年間続けている。

それは平沼先生御夫妻が、亡き御母堂の志を継いで建立された一字が点となって、今では本堂を始め、三蔵法師の靈骨塔、大黒殿、それには新らしい救世大観音像が加わり、参詣道には玉華門と云う色彩もまばゆい支那門がある。檜や杉の緑と相和して、言葉に顕し得ない美の極致だ。

道の左側を流れる清水のせせらぎに、小鳥の声の二重奏は天然音楽。

私は病人の相談相手をしている関係上、病気がよくなった方々や縁のおくれたお嬢さんを連れて、よく参詣に行く心が洗われるようだとするこぼれ、その上何人かの縁が結ばれてよろこばれている。

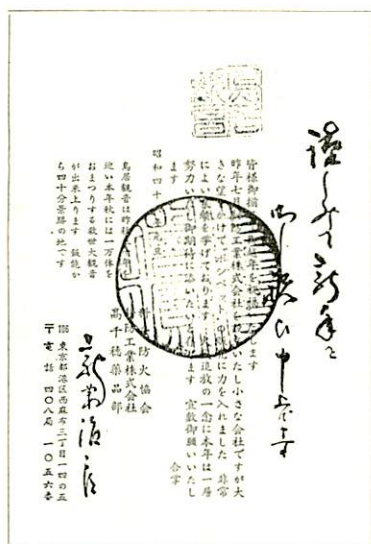
その何人かの仲人もして居るし、正月には孫のお守りで忙しいやら楽しいやら、これは平沼先生のお母さんが御夫妻の孝養に縁を結んで下さって居る親心ではないかと、感謝に堪えない。そこで私は鳥居観音を縁結びの観音さんと人々に話しをしている。

私の話を聞いて、縁遠い娘さんを連れて参詣した方が、良縁を得て喜んで頂いて居るのも珍らしくない。そんな馬鹿な——と思う方は一度お詣りして見ませんか、迷信だと思う方はそれもよし、私は自分の体験を書いたまでの事である。信ずるもよし、信ぜざるもよし、それはこれを読んで下さった方御自身の判断におまかせするとして、思い出の一枚の写真が、よかったなあと永久にあなたの眼になつかしさを語りかけるだろう。

南無観音妙智力

鳥居観音と新妻先生

新妻先生は、非常な研究者で、消火剤を始め、種々の薬品を研究發明されて、社会に貢献しておられます。過日も米国へ行かれて、消火剤の実験をされた処、大変な成績で、米国にも、これ程強力なものはない。と激賞されて、TVや新聞等で報道されました。又非常な信仰家でご自分でお出しになる年賀状を、名栗へ持参され、鳥居観音の判を押捺され、本堂で祈願の上、発送されると云う熱心さには敬服しました。尚鳥居観音の講元としても格別御支援下され、福徴講を結成され、毎年講員を引率参拝なさっています。



新妻先生の年賀状



風の毒

西遊記 (其の十四)

岡部 千三

ほら穴の入口は、大きな石が、扉のかわりにびたりとしまっていて、はいれない。

「おいきょうだい、ここの石に、なにか字がかいてある。よめたらよんでくれ。」

「お前よめないのか？字ぐらいよめないでどうする。え——と、これはな黄風山黄風洞とかいてあるんだ。

これは、ばけものすみかにかいてない。この石を、ぶちこわす方法はないかな。」

二人は、入口の石を、おしたりけったりしたが、なんとびくりともしない。

と、するすると、中から入口があいた。そして黄風大王が、ものすごい顔でとび出した。

「ええいっ、うるさい……この猿め、世界の外へとんでしまえ。」

口をとがらせて、ぷーっとひと吹きした。八戒だけは、入口の石のかげにいたので助かったが、悟空はも

んどりうって、大空へ吹きとばされてしまった。

悟空はくるりくるりと、木の葉のように、舞うように、軽々ととんだ、そしてどのくらいの時間かとんでしんと、おちたところはけわしい山の中だった。

「いたいっ。うーん。これヤビどい。」

からだをなでて、やっとおきあがったが。どこかわからない。あたりを見まわしたが、何にもみえない。そして目がちくちくといたんできた。

「しまった。あの風には、毒があったのだ。その毒が目にしみて、このようになったのだ、めくらになっては天竺へもいけないぞ。さあ、大変だ、お師匠さまに、申しわけがない。」

悟空は、手の先で、道を探し求めながら歩いた。

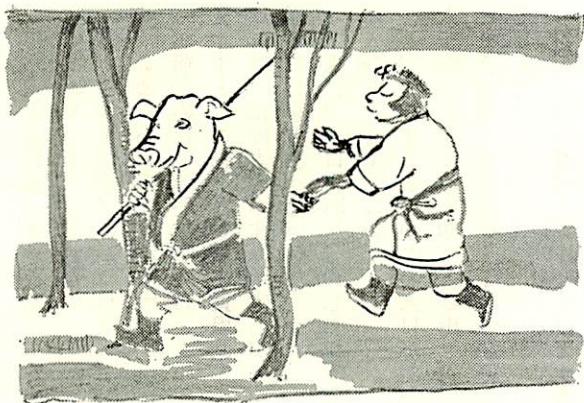
「八戒、八戒、きてくれよ、よう八戒」とその声はいかにもかなしそうである。

きいた葉

悟空の声は、本当になししいものであった。

「きょうだい。よう、きょうだい……。」

八戒の声が、すぐそばにきこえた。八戒は悟空が空にとばされたのを見て、いっしょうけんめいさがし歩き、ようやくさがしあてたのである。



嵐がやんだあとのような、それはそれは静かな山の中で、無気味な程である。

ごそり、ごそり、その足音は、悟空の耳にもきこえてきた。

悟空は目をとじて、両手を前方に上げて八戒の声のする方に向いて立っている。

八戒もそのすがたを見ると、あばれものの悟空とは思えない、むしろあわれに思えてくるのであった。

「やあきょうだい、やっと探し当ることができてよかった。いまそこへ行くからよ、動かないでまっけてくれよ。」

八戒の声をきくと、悟空はほっとして、

「八戒か、よく来てくれた。黄風大王の風でな、目をつぶされたらしい。お前のはなもわからない。どうか目医者を呼んできてくれ。目が見えなくては、お師匠さまをお助けすることもできんぞなあ。」

「だって、きょうだいよ、ここは山の中だけ、医者も歯医者も、いっこないだろう。」

「そんな呑気なこと云ってないでよ、わしの手を引いて、早く村へ行って医者を探してくれよ。」

「それもそうだ、よしきた、それでは、このおれの手につかまれよ。そら、岩がある。気をつけてくれよ。」

八戒は、悟空の手を引いて、静かに歩き出した。

運よく、山のふもとに、一軒の家があった。二人はその家へはいつて行った。見ると、ろばたに、老人がゐるす番をしていて、

「これは、これは、どうなされたな。」と、親切にきくのであった。

「きょうだいは、目がわるいのですよ。こちらに目医者はいませんか。本当にしらぬところでこまりました。」

八戒は珍らしく、ていねいである。

「黄風大王の風にやられましたな。あの風には、おそ

ろしい毒があつてな、ふつうの目薬では、何のききめもござらぬが、幸に、わたしのところ、よい薬があるぞな、これをつけてさし上げよう。」

老人は、悟空の目を薬で洗ってくれた。その薬のしみることに、いたむこと、思わず悟空は、うーんとうなつて身をちぢめていた。

「しずかにやすみなさい。あしたの朝までには、必ず見えるようになるだろう。」と云つて、老人は、二人をおくの部屋に案内して泊めてくれた。

翌朝、悟空は目をさましてびっくりした。見える、見える。いつもと同じに見える。何でもよく見える。

いたみもとれて、そればかりか頭の中までも、はっきりしたような気もちである。

そのほかに、もつとびっくりしたことは、夕べは、たしかに老人の家に泊ったはずなのに、朝おきて見ると、そこはただの草原で、柱一本、板一枚もない。

「八戒、ふしぎなこともあればあるものだなあ、これは一体どうしたわけだろう。」

「きょうだい、ゆめを見たのだよ。」と八戒も、ほかんとしているばかりである。

ふとそばの木をみると、一枚の紙がはりつけてある。悟空はそれを読んで、

「八戒、ここにわけが書いてある。わたしを助けてくださったのは、観音さまのけらいの方だったのよ、もったいない、ありがたい。」と手をあわせて静かに目をとじた。

八戒も、まねをして、手をあわせた。

さて目がよくなると、ひしひしと心配になるのは、三蔵法師のことである。

「八戒、いそいでお師匠さまを、探しに行こう。ぐずぐずしてはいられぬぞ。」

「そうだと、そうだと、いっしょに行こう。」

二人は、黄風洞へかけつけるのである。

悟空は、そこでやぶ蚊になって、ぶーんと、ほら穴へはいっていった。あちこちさがしてみると、すみのくらくらところの柱に、三蔵法師がしばらくいた。

「お師匠さま、悟空がまいりました。」と、法師の耳元にささやいた。

「すぐにお助けします。げん気をだして、少しの間おまちください。」

黄風大王はすぐそばにいたのだが、悟空のやぶ蚊には気がつかない。

「あのうるさい猿も、めくらになって、山の中をまごまごしているだろうから、もうここへはこられまい。」

こうなると、こわいものは、世の中にれいきつ菩薩ひとりだ、れいきつ菩薩にあっては、わしの毒風も吹かせることができないからな。」と、手下に酒をつがせながら大いばりである。

れいきつ菩薩と云うのは、自由に風をとめることができる仏さまで、いつも黄風大王の見はりをしてるのである。

「いいことをきいたぞ、そのおそろしいれいきつ菩薩におねがいして、このげんものを、ぐっと云う目にあわせてやろう。」

悟空は、きんと雲にとびのると、れいきつ菩薩の処へとんで行った。

「菩薩さま、大変です。三蔵法師さまが、黄風大王につかまって、酒のさかなに、されようとしています。そうなると観音さまに云いつかったお使いがつかまりません。どうぞあなたのお力で、大王めをやっつけてください。」

「おお、それはいかん。すぐ一緒に行つてやろう。」

菩薩は悟空とつれだつて、黄風洞へいそいだ。

「黄風大王外へ出る、よくもこのわしを風で吹きとばしたな、孫悟空さまが、勝負に参つたぞ。」と云いながら悟空、ほら穴の入口を如意棒でたたきつけた。

入口の扉が、がんと大きな音でひびくので、この音を聞いた黄風大王は、

「またきたのか。まったくあきれた猿だ。よしのぞみどおり勝負してやる。逃げようとて、にがさないぞ。」

酒によったいきおいで、ほら穴から走りだした。それを見てとったれいきつ菩薩は、空から一本のつえを投げおろした。宝もの魔法のつえで、そのつえは大王におそいかかり、大王をひとつかみにすると、つよい力で、岩かどにいやと云う程たたきつけた。

「うおっ。」

黄風大王は、一度うなったかと思うと、一匹のねずみになってしまった。

「ありがとうございます。」

悟空は、菩薩に礼を云って、ほら穴の中へかけ込んで行った。そして三蔵法師を助けてでてきた時には、すでにれいきつ菩薩は、どこにも見えない。

「おや、菩薩さまは……どこへかくれてしまわれたのかな。」

「かくれられたのではないよ。きょうだい。菩薩さまは、あっちだよ。ほらほら、向うの空をとんでいらっしやる。」

八戒が長いはなをつき出した方を見ると、雲の間を

鉄砲玉のようないきおいでとんでいく菩薩のすがたが見えた。

沙 悟 浄

法師と悟空と八戒の三人の旅はつづいて、やがて秋になった。

ある日、流沙河と云う川を渡ろうとすると、川の中から、物すごい顔をした大入道がでてきて、いきなりうってかかってきた。

「おお、へんなのが現われたね。たいくつしのぎにちようどいい。」と八戒は、悟空の方を向いてりきんだ。

「きょうだい、こんどはおれの番だ。このばけ物は、ひきうけた。おししょうさまと二人は、あっちの山へ行って見物していてくれ。」

八戒は、まぐわをかついで、ばけものの相手にでて行った。

「いいとも、お前がやれば、こっちは助かるよ。手なみを拝見するとしようか。」

少しはなれた小山に登って、悟空と法師は、八戒のはたらきを見ることにした。

「えいっ、この大入道め。」

「なんの、いのししのばけものめが。」

川岸ではげしくたたかっているのを、見ている悟空は、うでがむずむずして、じっとしてはいられない。「お師匠さま、八戒に加勢してやらないと、大入道めにやられてしまいそうです。すけだちにいきますよ。」と、云って如意棒をふるって、とび出した。

大入道は、前とうしろに敵をうけてはともかかないと思つたので、ざぶんと、川へとびこんでしまった。

悟空と八戒は、川の中をのぞいて見たが、大入道のかげも形も見えなかった。

「ええい。にげられてしまったか。さんねん至極、きょうだい、お前が出て来てじゃましたからいけないのだぞ。」

「ごめんごめん、お前の手がらのじまをしておし、がわるかったよ。もう手出しをしないから、お前は川へはいって、大入道を呼び出してきてくれないか。」
「がってんだ、ここへさそい出してくるとしよう。」

八戒は、すぐさま川へとびこんだ、まもなく川には大きな波がたって、その波は岸にざぶんざぶんと、よせてきた。

水の中で、八戒と大入道が、争いをはじめたからだ。悟空は又心配でたまらない。

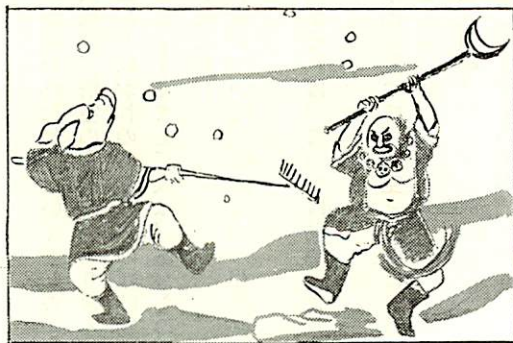
「八戒が勝てばいいが、もしものことがあつては大変だ、このままにしておけない、そうだ、どうしたらよいか観音さまにうかがってこよう。」

悟空は、観音さまのいる、南海のふだ山と云う山まで、きんと雲をとぼした。

観音さまの前に手をつけて、「お師匠さまがこまっています。水の中で、八戒が大入道にやられそうです。どうしたらよろしいでしょう。何とぞおたすけをお願いします。」

気がせいっているので、悟空の云うことは、めっちゃくちゃだった。

(以下次号)



川の中で戦う八戒と大入道

吉祥寺観音春の大祭

吉祥寺名店会館

鳥居 観音分院 社長 金沢富夫

春もたけなわ、万物の霊、芽生える三月二十八日、吉祥寺名店会館、開店十二周年記念、大売り出し行事の一環として、吉祥寺観音の、開帳御供養会を執行いたしました。

当日は幸好天に恵まれて、『交通、公害から幼い児童の生命を守り、明るい社会生活を営なもう』と云うキャンペーンをも併せ、立正佼成会のプラスチック部員百五十名の協力をいただき、吉祥寺名店会館金沢社長



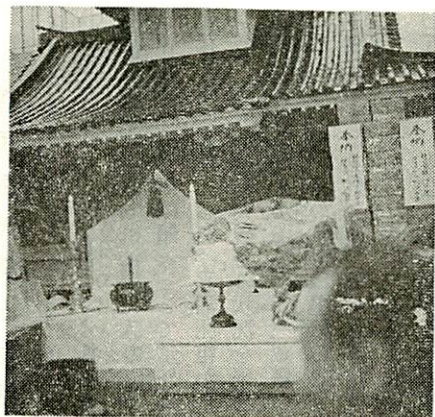
鼓笛隊の市中行進

を先頭に、地元武蔵野市長、並に市議、商工会議所会頭をはじめ、近隣商店会の方々の参列で市内の目抜通りをパレード致しました。折からショッピング中

の市民の、飛入りの参加もあり、市始っての大ページメントが展開され、次いで会館屋上の観音堂前で、盛大な供養会が執行されました。

当観音は三十四年三月、当館完成の際祀られました。御本尊不空絹索観世音菩薩は、名栗白雲山鳥居観音、開祖平沼弥太郎先生が謹刻奉納になったものです。

当日は平沼先生ご夫妻のご列席をいただきました。当館は十二年前此所に地下一、地上六階、延面積二千坪有する近代ビルが完成し、その傘下に、都内一流



の店舗を始め全国でも珍しい試みのチーンストアが開始されました。

その後全国各地に、駅ビルを始め、同種のものが出をみました。その発祥

屋上の観音堂

は当館であります。

長い間積み重ねられた経験と歴史をバックに、都内一流の専門店がその豊富な品揃えと、より高度化した顧客の欲望を満足させようと云う目的と、選定された立地条件の良さととの相乗効果により、相も変らぬ繁栄をみております。

その後時代の変遷に伴い、更に当館の充実を図るべく、幹線道路公園通り都道の拡張の計画に併せ、地下三階、地上八階、延床面積六万六千平方メートルの超近代化ビルを建設し、その中に現在の専門店街はもとより、キイ、テナントとして、都心一流百貨店並びに、大量月販店を誘致し、更に上層階には、フードセンター、娯楽の殿堂も設け、本格的ショッピングセンターを計画しております。目下隣接地の買収も、吉祥寺駅前周辺の地域社会の再開発に寄与すると云う本計画の大提言に御賛同を得、友好裡に進捗しております。計画完成の暁には全国でも数少ない大規模のものだけに、各方面注意的ので、その竣工が非常に期待されています。これも一重に屋上に奉安されております吉祥寺観音のご加護と信じ、関係者一同深く感謝致しております。

皆様ご来館の節は御参詣下さらば果報に存じます。

春季例大祭と世話人会

○四月十七日、十時本堂にて、名栗梅花流の御詠歌に有馬導師参堂、直ちに法要に入り、来賓多数が読経に唱和なされて、声は韻々として堂外に流れ、らんまんの花の香にとけました。平沼開祖からはお礼のあいさつと、完成に近い大観音の状況を平易に、にこやかに話されたので和やかでした。三蔵塔の法要の時は糠雨となつたので、その眺めは墨絵のよう、焼香の後大観音建立現況を視察され、折から百花撩乱の山内探勝をしていただきました。(二十二頁写真参照)

○五月七日、救世大観音世話人会開催、十時三十分本堂参拝に続いて建立現地視察、平沼開祖から内外の諸施工と構想等細かく説明され一同驚歎されました。十三時から会議に入り、平沼開祖の趣旨説明と、今津先生から建立経過報告がなされ、続いて老万休観音奉安状況の報告があり、十一月十一日落慶式及び老万休観音奉安式を挙行することになりました。出席者四十名で、主な方は富塚健、梶谷真一、宮沢庚子生、藤沢帝、小林貞治、若林五郎、榑原惣一、野崎三夫、吉崎弘、鈴木喜久蔵、植月忠雄、吉田博宣、吉田平蔵の各位。

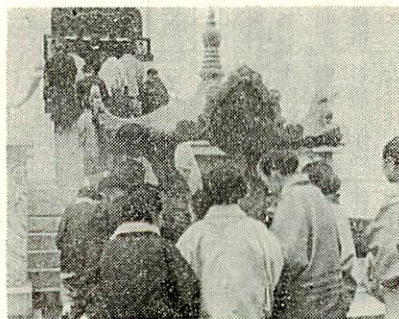
瑞穂町	狭山市	坂戸町	飯能市	港区	福岡県	練馬区	西多摩	中央区	世田谷	川越市	名栗村	飯能市	浦和市	文京区	住所
神山	戸門	松永	大野	黒川	松尾	中村	岡野	日本火災海上 保険株式会社	船口	山崎	岡部	横川	河野	参体	芳名
忠士	清治	清一	政巳	武雄	元春	弥一郎	利治	式拾体	亶子	嘉七	治作	一郎	武蔵	住所	
葉山町	名栗村	国立市	小田原	浦和市	渋谷区	坂戸町	茅ヶ崎	文京区	豊島区	川崎市	鎌倉市	浦和市	川越市	荻島	芳名
永井	加藤	佐武	渋谷	松原	鷺見	関口	毛利	友枝	中村	原	友枝	山本	松井	光枝	住所
穎信	辰作	のぶ	利男	栄美	保佑	勝治	登	英一	哲三郎	章	俊二	英生	瑞夫	芳名	
浦和市	行田市	群馬県	渋谷区	浦和市	秩父市	浦和市	浦和市	浦和市	浦和市	中央区	名栗村	浦和市	飯能市	住所	
大沢	松岡	塩原	野口	籠島	齋藤	飯田	古藤	千葉千代子	山口	松島	佐野	戸倉	高井	松浦福太郎	芳名
雄一	吾郎	邦雄	鶴吉	ひで	房子	悦子	純子	博子	友作	淑恵	富治	貴央	武夫	住所	
内訳	累計	内訳	会計	飯能市	戸田市	岩田	半田	皆野町	滑川村	新宿区	横濱市	文京区	浦和市	練馬区	住所
BA	六、二三〇	BA	(第五集)	市	市	市	市	山見	山見	寺島	金子洪太郎	岡部	武笠	佐々木栄一	芳名
五、一七五	〇	一六七八	九九五	杉山	寺田	久義	はな	加藤	中山	高矩	和子	治男	大村	卓	住所
				良	正一	茂	五体	武	正康						住所

昨年四月から一万余体観音奉安の勸募に着手してから、満一年、お蔭様で、六千余体になりました。何卒達成に一層のご協力を懇願いたします。

特別寄進者御芳名

(敬称略)

品名	寄進者
大燈籠	老基
手洗い大岩	大泉寛三
老個	平沼清儀



春期大祭に三蔵塔で焼香する参拝者達

御蔭をもちまして、建立中の救世大観音もいよいよ完成に近づきました。この堂宇内に奉安される壹万体の小観音も、各方面の方々からのご協力により、六千体をこえました。観音の偉大な功德力に守られ極楽の喜びをおうけになることと信じます。何卒有縁の皆様、この悲願達成に一層御協力願います。

合掌

永代供養料

観音像

A

(三三三) 五千円

B (二五、五) 三千円

御払込次第御仏壇用小観音(一八、八)を御送りします。

御払込先

埼玉銀行名栗支店 又は 埼玉銀行練馬支店

御申込書送り先

鳥居 観音 埼玉県入間郡名栗村

電話 〇四二九七〇四

名栗二七五番

同

鳥居 観音 練馬区小竹町一ノ五二

電話 九五五―〇四六五番

御一名様で観音像を何体申し込まれても差支えありません。

壹万体観音奉納申し込み用紙

号数

取扱者

区分 A B

供養霊位(何々家祖先代々又は御戒名)

御住所

御芳名

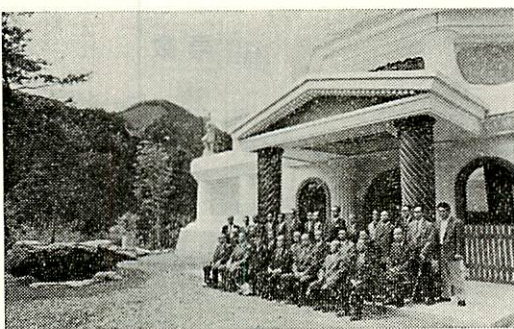
救世大観音の工事経過

一万体観音の極楽浄土

救世大観音も二年余を費して、漸く完成に近づきました。又 一万体観音も、早くも六千二百余体と云う沢山の御申込みに預りました。之を内部壁面に奉安申上げますれば、定めし壯観でしょうと思えますし、又、このような沢山の有縁の方々の御先祖様が、一堂に充滿し、互に手に手を取り合つて極楽浄土の喜びの中に永代安住なされる一大靈場となります事は、実に意義深い事と感激致しております。

外部の設計の概要

中央入口の柱は、ギリシャのクレタ島のクノックス宮殿の逆柱を取り入れました。この宮殿は、英国人が伝説をたよりに数十年を費して其の一部を掘り出したもので、牛頭人の伝説で有名な話は「とりひ第八号」に報告いたしました。又中近東では柱の根元に二頭の獅子がいる殿堂を沢山見ましたが、私はこの赤柱の根元の細いを利用して、三頭の獅子が廻つて、堂宇を守っている彫刻を取りつけ、入口踏石はセイロン島の



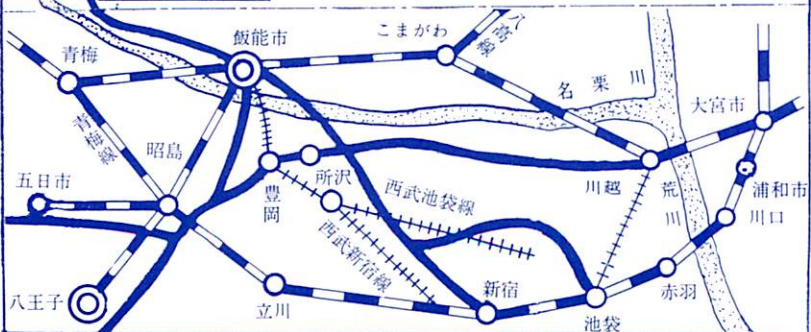
救世大観音世話人会

寺院でよく見る「ムーンストーン」をまねて、御影の一枚石に唐草模様を薄彫にしたのを敷き、又玄関天井には、蓮の花をとりまいて八人の天女のレリーフを取りつけ、入口に佐野友二氏奉納の徳川時代の仁王尊を安置し、外の壁面には沢田先生の観音三十三応身のレリーフ十六枚をはめ込み、屋上の四隅には二・五米の四天王を配して、仏教寺院の形式になるよう苦心しました。

とりひ 第十九 発行日 昭和四十六年七月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 責任 岡部千三
発行人 浦和市
印刷所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四名栗二七五番
発行所 武州印刷株式会社

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



灯籠流しと花火大会

- と き 8月16日 午後5時法要執行 本堂
- と ころ 午後7時本堂下 名栗川畔
- 志 納 金 先祖代々又は戒名、一燈金 500 円
- 申込方法 埼玉県入間郡名栗村烏居観音
電 話 0429704 (275) 番 埼銀名栗支店払込
東京都練馬区小竹町1の52 烏居観音東京事務所
電 話 (955) 0465番 埼銀練馬支店払込
尚当夜は花火大会と盆踊り大会が盛大に開催されます。

観世音センターと名栗川プール

夏をたのしく、そして公害からのがれて、静かなこの名栗観世音センターで汗を流し、又きれいな広々とした、名栗川プールで、自然に親しみながら、明日の健康づくりにどうぞご利用ください。

救世大観音落慶式と壱万体観音奉安式

- と き 11月11日 午前11時
- と ころ 救世大観音に於て
- 導 師 曹洞宗管長 岩本勝俊猥下 ご法話
- 御詠歌奉詠 名栗梅花流会員 ○花火打ち上げ

白雲山の秋

- 10月下旬から紅葉し、11月末までつづきます。
- 白亜の救世大観音と、三蔵塔がきれいな秋の空に、くっきりと浮び、紅葉と調和して、美観を呈します。